



中村俊定文庫
文庫 18
1030





Some handwritten text in cursive script, possibly a signature or a note.

百首相奇

立春



刻はるるをいんをいん垣や
三編の松針をうすくふ
三編のゆ針と立春此奇と思
ふをいんをいん松針
以下此等と不可説き

子日

病つゝをいんをいん
小まかにいんをいん
立春の次の日よりあつた
語をいんをいん
震

春のまはる年へうもの思ふぬ
元へ上りしはぬ夜よりなり
元へ上りしはぬ夜を眼の愁を
有感

雪

鼻をこしけしはししゆる谷川の
奥へたけつらふしるなり
雪を白を身あつたれとも
とふ奥のまらへるなり
雪のまを言へしを申へ
下他有奥の

若草

川をさるる水もさるる水も
雪のまを言へしを申へ
雪を白を身あつたれとも
とふ奥のまらへるなり
雪のまを言へしを申へ
下他有奥の

残雪

春のまはる年へうもの思ふぬ
元へ上りしはぬ夜よりなり
元へ上りしはぬ夜を眼の愁を
有感

梅

この歌は、梅の花の香りを詠じたもの

梅の花の香りを詠じたもの

梅の花の香りを詠じたもの

梅の花の香りを詠じたもの

梅の花の香りを詠じたもの

梅の花の香りを詠じたもの

梅の花の香りを詠じたもの

柳

柳の葉の緑を詠じたもの

柳の葉の緑を詠じたもの

柳の葉の緑を詠じたもの

柳の葉の緑を詠じたもの

柳の葉の緑を詠じたもの

早

草

早草の緑を詠じたもの

早草の緑を詠じたもの

早草の緑を詠じたもの

早草の緑を詠じたもの

早草の緑を詠じたもの

早草の緑を詠じたもの

橋

橋の石を詠じたもの

橋の石を詠じたもの

橋の石を詠じたもの

橋の石を詠じたもの

帰鷹

花見するも名のみを待たぬ
あつしとてまわつて鷹の
足見ぬとも元北流地のみ
居合のちちをこまれとて
首の毛を別あつしとて

春雨

春多れぬもあつしとて
ちちとあれとてあつしとて
流地のちちとてあつしとて
うね羽のつとてあつしとて
しとてあつしとてあつしとて

春駒

毛の文とあつしとてあつしとて
あつしとてあつしとて
ちちとてあつしとてあつしとて
遠のちちとてあつしとて
とてあつしとてあつしとて

嘆子鳥

あつしとてあつしとてあつしとて
ちちとてあつしとてあつしとて
世のちちとてあつしとて
世のちちとてあつしとて

苗代

換地のちちとてあつしとて

月くわくわく構うつし

當時の対巨勢庭の構うつし

今より下れ茶箱の香をら

くしつ新しの葉よののほし

雲 あつらひのききしり

西陣のつらつらつらつらつら

くらやみささのささのささのささ

さうらうさうらうさうらうさうらう

もろとらとらとらとらとらとらとら

をうくくく

敷き火

海に行ふ敷き火とくくくく

天くくくくくくくくくく

らんらんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらんらん

ぬくくく

蓮

蓮よのつらつらつらつらつらつら

花よの傳葉よのつらつらつらつら

さこの果香らんらんらんらんらん

氷室

つらつらつらつらつらつらつらつら

かかかかかかかかかかかかかか

さかかかかかかかかかかかかか

ありしものよきもなきもあはれ

泉 いづれも海にうかぶものなり

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

五秋

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれ

六秋

あはれあはれあはれあはれあはれ

米のあつらふと秋といふん

後此れなる分秋は七月或は六月

といふは物なりと云ふは秋也

秋は十月より来る秋と云ふ

と云ふ秋の意は用くこく

ありや

女也也

あつらふと云ふは秋といふ

と云ふは秋の又也

かゝるは秋の秋也

は

る

よの秋といふは秋といふ

あるも秋の秋也

秋野の秋は秋の秋也

あるは秋

秋也

西の秋といふは秋といふ

あるも秋の秋也

用の秋をたし秋といふ

は秋の秋也

西の秋といふは秋といふ

秋

秋の秋といふは秋といふ

三人の餅ふるも中読る
袴衣

百姓のうすはひのちかひは
ほらうら賀よあやうねん
鳥の古事と百姓の袴衣
は用之うれうら有身
ふれも思踏し候し候

出

長くととつまときうらひ
らんちうんとひつらま出
らんちうりんの越向れり
とちうらるる

け白着思踏し候し

通

御前のうらひは作りのまたる
はとひらうらるる音をす
御明の王弘使来りてう
りて通を得しうけ通
午作のこまを思踏し
唐装する所し

紅毛

米とせせは清めるものも
うら秋のうらるる
一入うらるるの
又うらうらるる

九月書

秋の日の経き物と七月也
いふと懐きやるるもの大ふ

この大ふいさうも其命あり

子細

物々 きこらるるれゆらりていふ
くせしきりていふ

俗のありせむりりり神は月

ひんやう此神一身は神

けははれ納めしきうて

あつたうれい身ふさうての

貪欲の神は月ともいふ

彼も法にや

時雨

昔の又母しんやゆらりていふ
はあもりていふ

やよむゆる物のあつたせは

あのももはたけしを深から

無縁和るのやとむ奇え

ゆきしれいさよ小物のあつ

あつた山をなるといふと

らんはの坂なのていふと

奥アア

霜

しんやうしんやうあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

こーらていふの果は神物の

あつたあつたあつたあつた

神物のあつたあつたあつた

あつたあつた

雪教 ひやうきやう 天より降りて
大光 おほひかり 餅を切ると
霧 きり 雪を切ると
ひあられ ひあられ 餅の
物 もの のうら のうら 餅
と と 餅

雪

氷室の雪 こおりむろのゆき 餅を切ると
用 もち られ もち 餅

餅 もち 餅を切ると
下 した 餅を切ると
祖 そと 餅を切ると
あ あ 餅を切ると
よ よ 餅を切ると

餅

氷 こおり 餅を切ると
あ あ 餅を切ると
よ よ 餅を切ると

我々が「Theosophical Society」の
不平等の反対に、
付録。法陽社の発行
と一と記された
「Theosophical Society」の
対論

忠告

我々が「Theosophical Society」の
不平等の反対に、
付録。法陽社の発行
と一と記された
「Theosophical Society」の
対論

不遇

我々が「Theosophical Society」の
不平等の反対に、
付録。法陽社の発行
と一と記された
「Theosophical Society」の
対論

不遇

我々が「Theosophical Society」の
不平等の反対に、
付録。法陽社の発行
と一と記された
「Theosophical Society」の
対論

物建意

まじいこころのまじいこころ
あまの青あまの青
はつづのあまの青
まじ

五運意

一運いんあまの青
あまの青あまの青
あまの青あまの青
あまの青あまの青
あまの青あまの青

極人又あまの青
道のあまの青

あまの青あまの青

思

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

片思

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

あまの青あまの青

恨

うらやまの心をいかにいかに
うらやまの心をいかにいかに

別 緒の糸のきこころのひま

つらき文うらやまとして

奇 梁肉焼く刺のこま

又 妊懸いでたれと母懸る

このきこころのひま

その別とあつた

いにし

曉

あふくそむいちむく

そあつちむく

横曲の音にそむく

松

うらやまの心をいかにいかに

松 立の木のうらやま入海の

波こそあつす又殊なうら

あつちむく

越白竹

竹 世のあつちむく

竹の子とわがまはあつちむく

菽 梅とつらむく

昔

うらやまの心をいかにいかに

君の糸子世にうらやま

よこれくしてあつちむく

けあつちむく

を採り

山

剣すくてもしの煙ぐまの
ねらうくと思ひしりら

この美言性の趣言聖の

作らやとせむねほら

河み人のまねとくちの事の時

ほししせうねまはら

とつととぬるけ桂川

け越え林が

を病のうらみ

和宮は浦入塩平のゆま心

あまのちかえりともうら

かたの身よもは出づるち

野

うらたらはあまのひきとち

きんとのねんん

葬送のともよむ可憐

但介さる路うら

園

ぬいちはよわのうを地あ

附のひまぬのりらの園ち

去く年薩土陳の信け

あまのちかえりともうら

一着のととれたくあ

三つも何倍取しお積し

橋 遠眺。わたりやうりて都や
やうはすれはるのたし

おのゝくさよつちのせんと世し

佛代とよのの御田の七橋

よ代とよのの御田の七橋

いつ中そと君うせとせ橋

とせおの御田の七橋

御田 さうりあつて急とらうけ
まののさうりあつて急とらうけ

御田よとよとんととせかり

油よとらんとおよ孔子

意のらんとたたわれと

い(お)と油よとらんと用ら

都園よ瓢箪すよとらん

とらとらとらとらとらとら

枕 さうりあつて急とらうけ
まののさうりあつて急とらうけ

草花飯とらとらとらとらとら

すのひあつとらとらとらとら

順礼のとらとらとらとら

おあつとらとらとらとら

別 さうりあつて急とらうけ
まののさうりあつて急とらうけ

立別 さうりあつて急とらうけ
まののさうりあつて急とらうけ

近口上階の御田とらとらとら

山家

の二ヶ条けしし回る

述懐

大甲なる榜うら傷か二三本
貧乏の鉢をあわすいなん
榜固扇まのんや神の位と
いへば上の果敢えんこころ
まにあわすいなんせん
いふ汝増也すくや
祝

ヤサれーなつらうくくく
天下太平回ふあんと
これうゝ又批刻有悖

倅異卒二首
七の長十回

建仁寺遊長き

右天正己丑夏中日作

也足軒号也

山田

